

第 69 回・歴史教育者協議会全国大会（神奈川／関東大会）レポート
第 2 1 分科会（障がい児教育）

レポート名：「障害児学童疎開資料集《全 4 巻》」刊行の取り組み
— 光明学校の学童疎開関係の資料を中心に —

日時：2017 年 8 月 2 日（金）～8 月 4 日（日）

場所：法政大学第二中・高等学校（神奈川県川崎市）



報告者：竹下 忠彦
東京都立町田の丘学園
（東京都歴史教育者協議会・町田支部）

I) はじめに

1945年5月から1949年5月にかけて、当時日本で唯一の公立肢体不自由校の光明学校《東京都世田谷区》は、長野県の上山田温泉に学童疎開した経験をもつ。障害児と教職員、家族と受け入れ施設それぞれの努力を記録しておきたい、再び障害児が戦争によって当たり前の学び・生活が奪われてはならない、そのような思いでこの資料集は刊行される運びとなった。レポーターは資料集の編集委員であり、この立場から本報告を行う。

II) 本論

本資料集の刊行は、2016年7月から準備を始めた。出版を六花出版（東京）が担当。編集を山本有紀乃（六花出版）、松本昌介（元都立養護学校教員）、飯塚希世（大学図書館員）、中村尚子（大学教員）、細渕富夫（大学教員）、竹下忠彦（都立特別支援学校教員）で行っている。（現在進行中）

なぜ障害児学校の学童疎開を問題にするのか。また一般学校の学童疎開とどう違うのか。この問題を考えるヒントは、『障害児 学童疎開資料集』刊行パンフレット冒頭にある。

「戦争の激化に伴い、地上戦が予測される地域や空襲の対象になる都会から学齢児童を「避難」させる「学童疎開」は、一九四四年から本格化する。兵士の供出とともに家族を引き裂く学童疎開は、次世代の兵士である子どもを生き延びさせる「戦闘配備」と称され、同時に空襲対策の「防空活動」に足手まといになる幼少年を強制的に退去させるものであった。

東京、大阪など都市部の学童たちの集団疎開や縁故疎開が進むなか、しかし、肢体不自由児や視覚障害児、聴覚障害児の疎開は「国の役に立たない者を助ける必要はない」と最後の最後まで後回しにされ、疎開後、戦争が終わったのちも、もっとも遅い帰郷となった。

疎開先から発せられる「通信」には、卒業生から兵役に就くものが出た際に、自分たちの学校から皇国の兵士が現れたと喜ぶ声が載り、また故郷の家族を心配させまいと元気にふるまう子どもたちの様子が描かれる。

学童疎開とはなんだったのか。障害のある子どもは戦争の時代をどう生きたのか。子どもたちの手記を中心に貴重資料を収集し、復刻する。」（『障害児 学童疎開資料集』刊行パンフレット冒頭より）

本資料集の企画書（2017年2月）は以下の通りである。

企画書

- 1 企画名 編集復刻版『障害児 学童疎開資料集』 全4巻
- 2 編集 松本昌介・竹下忠彦・飯塚希世・中村尚子・細渕富夫

2 内 容 東京における障害児学校の学童疎開の資料を日本最初の公立の肢体不自由児学校・東京市光明国民学校を中心に収集し、障害児童の疎開の実態を明らかにする資料集
成。

3 概 要 B5判／上製／各巻約400ページ

第1巻《光明学校編Ⅰ》

光明学校 学校通信『学寮通信』第1号～第36号（1945年9月～49年2月）、光明学校卒業生通信『仰光通信』第1号～第52号（1944年9月～53年4月）、『学校新聞』No.2～12（1948年4月～49年3月）、『クラスの友』第7号～No.14（1948年6月～49年3月）

第2巻《光明学校編Ⅱ》

波田野忠雄『肢体不自由児の学校と教育』No.2～10（1949年3月～52年1月）、『新築落成記念誌』（1941年11月）、『創立十周年記念誌』（1942年11月）他諸資料

第3巻《疎開時代日誌編／回想・研究編Ⅰ》

日本聾話学校、東京盲学校の障害児学校の疎開中の日誌資料／
1970年代以降刊行された回想類および研究資料

第4巻《回想・研究編Ⅱ》

4 刊行時期 第1回配本＝第1巻・第2巻 2017年5月21日
第2回配本＝第3巻・第4巻 2017年11月

5 序 文 逸見勝亮

6 解説・解題 松本昌介・飯塚希世ほか

7 推 薦 大門正克（横浜国立大学）・菊池澄子（児童文学作家）・藤井克徳（日本障害者協議会）（以上、敬称略）

企画書からわかるように、資料集は全4巻。光明学校の学童疎開関係の資料は、主に1・2巻に納められている。

この資料集の刊行にあたって、編集委員代表の松本昌介は、刊行の意義を編集委員の立場から以下のように綴っている。

刊行にあたって

戦時中、障害児やその親御さんたちはどんな思いで過ごしたのだろうか。

米軍による空襲が激しくなって、幼い子どもたちは家族で農村部に、あるいは学校単位で集団疎開した。

しかし、手のかかる障害児は疎開計画にも入れられず、都会に取り残された。肢体不自由児の学ぶ都立光明国民学校は、取り残されて、世田谷の校舎に寝泊まりし、校庭に防空壕を作って空襲の時は教員が子どもを抱えて逃げた。

空襲が激しくなり、ここも安全ではないと校長が疎開地を探し、一九四五年五月、長野県上山田温泉に疎開した。東京の校舎は焼け、帰れないまま四年間不自由な生活を強いられた。東京に残った家族も家を焼かれることもあった。その親元に毎月わら半紙の手紙が届いた。「学寮通信」と名付けられた一枚の手紙に親はどれだけ安心しただろうか。この通信は校舎が再建されて東京に復帰するまで4年間発行され続けた。

盲学校、聾学校もそれに近い不自由な生活を送った。教職員も疎開受け入れ側も障害児を守るために努力した。

障害児と教職員、家族と受け入れ施設それぞれの努力を記録しておきたい、そんな思いでこの記録は作られた。

学校統廃合の中で貴重な戦中戦後の記録は失われ、疎開経験の障害者は高齢化していく。この仕事は今やらねばならない、そういう願いを込めて障害児の疎開体験、戦中戦後の学校教育の資料を求めてわれわれは長年動き回った。

ふたたび障害児が戦争によって当たり前の学び、生活することが奪われてはならない、そういう思いを込めてこのシリーズを作った。

編者代表 松本昌介

Ⅲ) まとめ

・最後にこの資料集刊行の研究上の意義に触れておく。

「松本昌介氏たちが収集・整理を行っていた一連の障害児学童疎開関連資料が、このほど復刻をみた。わけても、「学寮通信」・「仰光通信」は、東京都立光明国民学校（現光明学園）児童生徒の学童疎開にかかわる最も基本的な資料であり、肢体不自由児の生々しい記録——白眼視・侮蔑に抗う強靱な個性と矜持の表出——である。主に障害児教育の内側に向けて発せられた資料を編んだこの資料集を、障害児の疎開資料とだけ読むと、障害児の学童疎開を見失ってしまうだろう。

友達が牽くりヤカーで通学していたポリオの少年は、手術を経て自力で歩けるようになった。戦傷で両手を失った僕の養父は、民生委員としてこの手術に関与した。復刻資料を読みながら、ふたりが後にも先にも声高に語らなかったことを、脈絡はないまま想起する。」

「前略（これらの抜き書きは、）障害児学童疎開史研究は、「今次学童集団疎開」史研究に対する批判を保持してはじめて成立する課題であることを示唆している。資料調査と研究の達成を示している本資料集は、さらなる資料調査と研究を迫っているのである。」

（『障害児学童疎開資料集』の刊行に寄せて 逸見勝亮より）